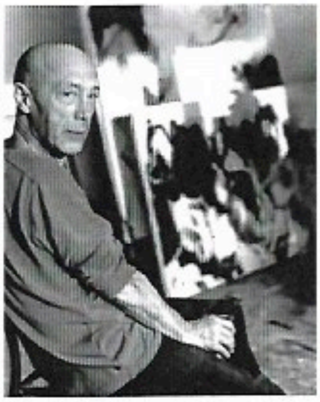
オリヴィエ・カテ個展 ≪Contemplations≫：生駒にて開催

5月15 - 30日の土曜と日曜、生駒市山崎町の GALLERY IND.（ギャラリー・アイ・エヌ・ディー https://www.gallery-ind.com/ ）にて、ルーアン在住のアーティスト Olivier Catté（オリヴィエ・カテ）さんの個展が開催されました。当協会副会長オリヴィエ・ジャメさんを通じて、ギャラリーのディレクター吉倉拓真さんのご協力のもと、カテさんから奈良日仏協会のみなさんにメッセージが寄せられました。



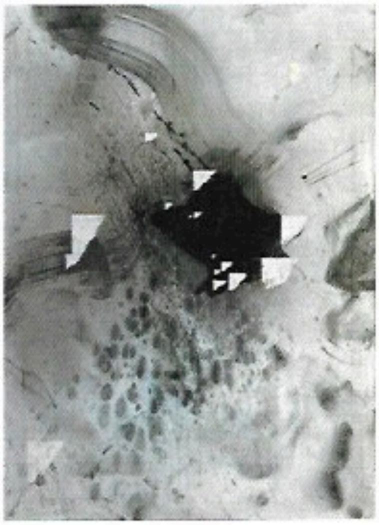
2016年中国に芸術家として滞在した後、私の芸術の仕事は深く揺れ動きました。知性の重圧から解放されて、本質に近いものを味わうに至り、東洋は私に新たな道を開いてくれました。例えば、インクとそのあらゆる方向への分散（多少は抑制できるものの）という予測しがたさの中で仕事をすること。画紙の浸透性を用いること。手短かに言うなら、たくさんの造形上の偶然の成行きが、私というものを引き下がらせて、独自の視点からの幾何学と遠近法にゆだねさせたのです。私の作品は、もはや私を従わせて作品展開上の固有の論理を有することがなくなりました。

とはいえ、多様な視点が私に動きのきっかけを与えてくれました。ちょうど、散歩するとき視線の向かう先に応じて事物が変化するように。私はその場の空気を表現し、空白と空白の間にあるすきまを具象化します。山、滝、雲、風のそよぎ、楽曲の一節の主題、渦巻、街、焼け焦げた木片の粉、宙に浮かぶ龍、…。

私の絵画は、情動の記憶、すなわち長いあいだ凝視した結果が土台になっています。心残りなのはパンデミックのために、私自身が日本に行って生駒の GALLERY IND.で、この展覧会をみなさんに自分で紹介できなかったことです。また今度ということがあればと思います。

（オリヴィエ・カテ Olivier Catté）

「浮遊する世界の諸相」
(Mondes à la Dérive, 2019)



「栄光の道」
(La Route Glorieuse, 2020)

◆日本の画材を用いた作品を鑑賞していると、いつか訪れた天川村の澄んだ川の水面のゆらぎを見ているような感覚に襲われました。これは私が今まで見てきた抽象画の中でも日本人の心にスッと入ってくるとても洗練された作品です。そして、東洋と西洋のコミュニケーションというテーマがうまく表された作品だと思いました。（泉荘太）

◆梅雨入りの雲が生駒山からおりてきている。駅に近い静かな住宅街、竜田川は上流よりも川幅が狭くそのそばのユニークな設計のカタチの集合住宅の一階ギャラリー。まことに小さな会場に数枚の絵。欧米の現代絵画らしからぬとても静かなモノトーンタッチである。ホームページの「Contemplations」というテーマ説明を読むと、カテさんは、東洋的な思考法について、瞑想とか沈思黙考と言う面から考えているらしい。一枚一枚をじっと見ていたら、黒い矩形の面が、建物のようにも黒い箱のようにも見える。三角や四角の角ある空白が飛んでいる。近づいて下方に目を当てると、細い筆で書いた曲線が幾筋もある。このあたりは線や面のモンタージュとも見える。隣の一枚には、青黒い色で霧のような気配が描き込まれ、要するにカタチの出来かかったもの、その黒っぽい画面をまた四角な白が不連続に飛んでいる。遠近法では無い奥行き…。立体的ではないが、なにかが積まれている。これらが作り上げる空間の不思議なアンバランスに引き込まれた。谷底？　ビル街のすき間？　それにしてもこれは水彩画？　版画？　シルクスクリーン？　この線は墨流しかな？　すると、一緒に行った息子が「マーブリングみたいやけどなあ」と言いなおして首を傾げた。しかしこれは、岩絵の具による手書きの細い曲線なのであった。このような線やカタチの画面には比喩ではいい表せないメッセージがあるようだ。カテさんの提案通り、心を無に帰して、思い出などをあてはめていたら、なにか非常に静かな気持ちなった。帰り道、曇り空の下で街を流れる竜田川は、細く小さく鈍く光って流れていた。（泉悦子）